トピックス

メクラカメムシの代替名「カスミカメムシ」の提唱

福岡市早良区　宮本正一（みやもと しょういち）
北海道教育大学札幌校　安永智秀（やすなが ともひで）
国立科学博物館動物研究部　友國雅章（ともくに まさあき）
埼玉大学教育学部　林正美（はやし まさみ）

カメムシ類のなかで最大の科であるMiridaeの和名として，明治以来一世紀あまりの間，「メクラカメムシ」が用いられてきた。この和名はドイツ語の“Blindwanzen”の直訳で，本科の多くの種が「単眼を欠いている

表－1　科名，亜科名，応用上重要な種の改称例

学　名	提唱和名	旧和名
Family Miridae	カスミカメムシ科	メクラカメムシ科
Subfamily Isometopinae	ダルマカメムシ亜科 （本亜科のみ従来通り）	
Subfamily Psallopinae	オオメカスミカメ亜科	オオメメクラガメ亜科
Subfamily Cylapinae	キノコカスミカメ亜科	キノコメクラガメ亜科
Subfamily Orthotylinae	アオナガカスミカメ亜科	テンサイメクラガメ亜科 →アオナガメクラガメ亜科
Cyrtorhinus lividipennis Reuter	カタグロミドリカスミカメ	カタグロミドリメクラガメ
Halticiellus insularis (Usinger)	クロトビカスミカメ	※クロトビメクラガメ
Orthotylus flavosparsus (Sahlberg)	テンサイカスミカメ	※テンサイメクラガメ
Subfamily Phylinae	チビカスミカメ亜科	チビメクラガメ亜科
Campylomma chinensis Schuh	コミドリチビトビカスミカメ	コミドリチビトビメクラガメ
Tytlus chinensis Reuter	ムナグロキイロカスミカメ	ムナグロキイロメクラガメ
Subfamily Bryocorinae	シダカスミカメ亜科	シダメクラガメ亜科
Nesidiocoris tenuis (Reuter)	タバコカスミカメ	※タバコメクラガメ
Subfamily Deraeocorinae	ツヤカスミカメ亜科	ツヤメクラガメ亜科
Stethoconus japonicus Schmacher	グンバイカスミカメ	※グンバイメクラガメ
Subfamily Mirinae	カスミカメムシ亜科	メクラカメムシ亜科
Adelphocoris lineolatus (Goeze)	ウススジカスミカメ	※ヒゲナガメクラガメ →ウススジメクラガメ
Apolygus lucorum (Meyer-Dür)	コアオカスミカメ	※コミドリメクラガメ* →コアオメクラガメ
A. spinolae (Meyer-Dür)	ツマグロアオカスミカメ	※ウスミドリメクラガメ* （ツマグロアオメクラガメ）
Lygocoris pabulinus (L.)	ナガミドリカスミカメ	ナガミドリメクラガメ
Lygus rugulipennis Poppius	マキバカスミカメ	※マキバメクラガメ
Stenodema calcaratum (Fallén)	ナガムギカスミカメ	※ナガムギメクラガメ
Stenotus rubrovittatus (Matsumura)	アカスジカスミカメ	※アカスジメクラガメ
Taylorilygus apicalis (Fieber)	ウスモンミドリカスミカメ	※ミドリメクラガメ* →ウスモンミドリメクラガメ
Trionotylus caelestialium (Kirkaldy)	アカヒゲホソミドリカスミカメ	※アカヒゲホソミドリメクラガメ

※旧和名（「農林有害動物・昆虫名鑑」）は1987年刊のもの，「→」で示したものはその後，「日本産昆虫種目録」(1989，九州大学)，「日本原色カメムシ図鑑」1993年等で提唱された和名を示す．

＊コミドリメクラガメ，ウスミドリメクラガメ，ミドリメクラガメなどの和名は，いくつかの種についてランダムに使用されたり，誤同定に基づいていたこともあるので，必ずしも表記の種と正確に対応していたわけではない（原色日本カメムシ図鑑，1993）．

Proposition of Revised Japanese Names for the Mirid Bugs.　By Syôichi Miyamoto, Tomohide Yasunaga, Masaaki Tomokuni and Masami Hayashi

（キーワード：カスミカメムシ，代替名，メクラカメムシ，半翅目）

こと」に由来する。ロシア語，中国語，ハングル語などでも同じ意味の名が使われている。

本科のすべての種は立派な複眼をそなえ，視覚もよく発達しているが，和名からの連想で，この仲間があたかも「視覚の欠如したカメムシ」であるような誤解を招きがちであった。多くのカメムシ研究者が，その都度誤解を解くため説明を要するなど煩わしい思いをしてきたので，これまでに何度か改称を検討したこともある。しかしながら，科の学名である“Miridae”の語源が明らかでないことや，この科が形態面でも生態面でも，極めて多様性に富んでいることから，総括的かつ具象的な，すぐれた代替名になかなか思いおよばなかった。

近い将来，日本原色カメムシ図鑑（全国農村教育協会，1993）の続編の出版を計画している筆者らは，この機会に本科の総称名の改訂を再検討し，いくつかの候補の中から「カスミカメムシ」を採択することで意見の一致をみた。この和名は必ずしも具象的ではないが，「分類・同定が困難でいまだ未知種も多く，全貌が容易につかめないこと」，「一般に小型で保護色を有し，農作物に被害が出ても加害者として特定しにくいこと」，「柔らかい表皮構造をもち，しばしば透明感のある色彩を呈すること」，「動きが敏捷で，捕らえようとすると，まさに“雲を霞と”逃げ去ること」などなど，本科の一般的な特徴を「カスミ」という言葉で表現したものと考えていただきたい。

今後は必要に応じて，これまで使われてきた「○○メクラガメ」を「○○カスミカメ」と呼び換えて行くことにしたい。唯一，*Adelphocorisella lespedezae* MIYAMOTO et YASUNAGA の和名である「カスミヒゲナガメクラガメ」だけは，総称と重複するので「ヒゲナガカスミカメ」に改称する。表-1に，我が国から知られる亜科の和名と，いくつかの応用上重要な種の改称例を挙げておく。

新農薬紹介

「殺菌剤」

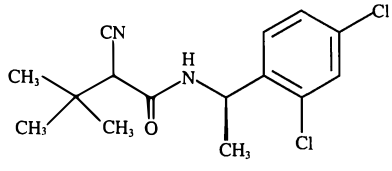
ジクロシメット粒剤　(12.4.28)

本剤は住友化学工業(株)が開発した，イネいもち病に対し優れた防除効果を有する殺菌剤である。イネいもち病菌に対する直接的な抗菌活性をほとんど示さないが，菌体のイネ侵入時に形成される付着器のメラニン生合成経路におけるサイタロンから1，3，8-THNへの変換を阻害することより，侵入に必要な機械的強度を低下させ菌の感染を防いでいる。

商品名：デラウス粒剤

成分・性状：製剤は（*RS*)-2-シアノ-N-[(*R*)-1-(2,4-ジクロロフェニル)エチル]-3，3-ジメチルブチラミドを3.0%含む類白色細粒である。純品は結晶性粒末で，比重は1.24（23℃），融点は154.4～156.6℃，蒸気圧は2.6×10^{-4} Pa（25℃），溶解度（g/*l*，20℃）は水6.38（μg/m*l*，25℃），アセトン271，メタノール116，キシレン5，n-ヘキサン0.1である。熱に安定。酸およびアルカリに対し安定。光に対しては蒸留水中においてほとんど分解されない。

（構造式）



適用作物・適用雑草及び使用方法：表-1参照。

① 育苗箱の上から均一に散布し，葉に付着した薬剤を払い落とし，軽く散水して田植機にかけて移植すること。

② 軟弱徒長苗，むれ苗，移植適期を過ぎた苗などには薬害を生じるおそれがあるので注意すること。

③ 本田の整地が不均整な場合は薬害を生じやすいので，代かきは丁寧に行い，移植後田面が露出したりしないように注意すること。

④ 本剤の使用に当たっては，使用量，使用時期，使用方法などを誤らないように注意し，特に初めて使用する場合には，病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

毒性：（急性毒性）　普通物

通常の使用方法ではその該当がない。

（魚毒性）　B類

通常の使用方法ではその該当がない。

なお，本剤の他ジクロシメット粉剤（デラウス粉剤DL），ジクロシメット水和剤（デラウスフロアブル）が同時登録された。

各々の適用作物・適用病害及び使用方法：表-2，3参照。

(37ページに続く)